

RPJ News

2018年 11月号

特定非営利活動法人(NPO法人)

精神保健福祉交流促進協会 Refresh Project

〒130-0001 東京都墨田区吾妻橋2-17-7-801

毎月1回発行 E-mail ref-pj@mx5.ttcn.ne.jp

発行責任者：志井田美幸/ 長野敏宏/ 仁木守

連絡先 090-1811-7119

ホームページ <http://www2.ttcn.ne.jp/ref-pj/>

内 容

* グループホーム「あぼかど」と「あぼろん」

理事 社会福祉法人ひつじ 理事長 藤田 安

* グループホーム「あぼかど」と「あぼろん」

理事 社会福祉法人ひつじ 理事長 藤田 安

大体一年に一度、この RPJ ニュースを通じて私たちが課題と感じていることや実践について、意見や感想などをお伝えしてきました。今回は、静岡の社会福祉法人ひつじの藤田が、今年の4月から始めることになったグループホームについて、どう考えて来てどう作って、どのように運営をしているのか、ざっくりとお話しさせて頂くことにしました。私をはじめとして私たちの法人の多くの職員がそれなりに「生き辛さ」を持っている人たちだけに、ある種の偏りがあることや独善的な色彩を感じられるとは思われますが、最後までお付き合い下さいますよう、宜しくお願い致します。

精神保健福祉交流促進協会という、リフレッシュセミナーという言葉がすぐ頭に浮かんでしまうほど、日々悪戦苦闘して来ただけに、気分を一新し、ついでに何かの発見が出来るような研修をさせて貰ったことを大変有難く感じていました。それほど日常に埋没すると、日々をこなすのに精一杯になってしまい、頭でわかっている、気持ちが付いていかななくなることを昔から私などは感じていましたので、大切なものだったのだろうと今更のように思い出されます。

さて前置きはこのくらいにして、そもそもグループホームをどのように考えて来たか、そのことからお話ししたいと思います。その昔は、グループホームを国と県の補助金で施設整備しようなどということは考えていませんでした。極めて簡単に言えば、一寸大きな民家をそのままグループホームとして使うことが一番現実的なことだし、またそのようなありかたで十分対応していけるだろうと考えていました。もちろん運営を考えると、気持ちはあっても容易に踏み込めない歯がゆさをずっと抱え込んで来たといった方が正確かもしれません。果たして運営できるだけの財力を持たずして、気持ちだけで走っていけるものではないのにどのような状況になると、グループホームの運営に乗り出すことが出来るようになるのだろうか、このような不安の方が大きかったと言えます。そうはいつても、居場所作りや就労支援を手掛けるようになって、あと一つの寝泊まりできる場所の提供を始めるには、勇気がなかっただけでなく、事業所の数も増え、利用者の気持ちに添おうとすればするほど、運営と経営という大きな課題への挑戦自体が未知のことでしたから、この二律背反する課題をどうまとめ上げるかは大きな課題になっていました。

グループホームを利用者の気持ちになって、どんなものを作るとそれに応えられるかを考えるようになった結果が施設整備をすることになったと思っています。それは、あちこちのグループホームを見学させて貰

ってのことというより、ヴィレッジ研修をはじめとする地域サポートシステムから連想されるものであって、寝泊まりできる場所を作る以上に、利用者から見た時、束縛されず、使い勝手がよく、居室としての独立性が保たれ、確かに人がそこで暮らしていると実感できる建物を作ろうと強く思うようになりました。こうして出来上がったのが、磐田の「あぼかど」と袋井の「あぼろん」というグループホームです。紙面ではすべての部屋や建物の作りを伝えきれないのが残念なことです。私たちが精一杯考えて作ったものです。

「あぼかど」と「あぼろん」は全く同じ作りの建物で木造の二階建ての建物です。グループホームとしての定員は7名で、同じ建物の中にショートステイ用の部屋を2部屋作りしました。建物自体の一寸した工夫として、居室全て、二方向から光を取り入れられるようにしました。一階も二階も、居室以外の空間をかなり広く取り、一見無駄とさえ思えるほどの広さのラウンジを作りしました。居室は世話人の部屋を含め10部屋あり、そのうちの6部屋が6畳の和室に6畳のダイニング、キッチン、お風呂、トイレ、洗面所、洗濯機付きの自主独立性の高い生活を希望する人用の部屋を作りしました。残り3部屋は一間半の押し入れと6畳の部屋のみ小さな部屋を作りしました。小さな部屋の方がよい、広いとかえって不安になるという人がいることを予想して作った部屋です。ショートステイ用の2部屋も同じ小さな部屋としました。

現在、二人の入居予定者を残すだけで、二人が入居すると、全ての部屋が埋まることになります。

グループホーム開始前に私たちは、入居することになるだろう人たちのことをあれこれ考えました。そして話し合いました。その話



↑キッチン付き居室、↓キッチン無し



し合った内容の人たちと現在入居している人たちとは、大きく異なりませんでした。早くから予定した人もいれば、急遽入居を決めた人もいますが、グループホームというものがかつてより知られるようになり、結果的にその対象になると思われる人も、関係機関同士の連絡によって絞られるようになったのだらうと思われま

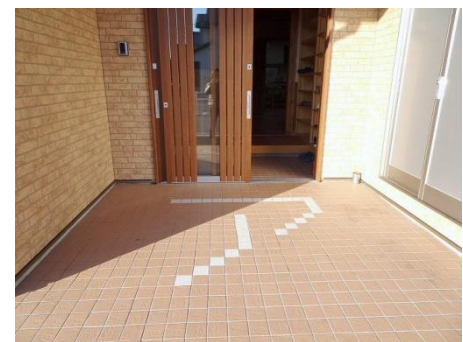
す。運営については、お付き合いさせて貰っている関係者の人たちから多くのことを教えて貰い、何とか夜間一人世話人が休憩を取りながらも同じ建物の中で過ごす体制を作ることが出来ました。労働基準法をはじめとする労働関係法規の遵守、加えて、経営的には詳細な検討をして来てのことではありませんので、運営を始めて初めて分かったことも多く、特に、経営するという点からこの間のことを振り返ると、まだほんの僅かな時しかたってはいませ



あぼかど外観



あぼろん外観



↑玄関前 ↓入口



んが、予想していたこととは大きく異なっていないことが確かめられ、ほっとしているのが正直な気持ちです。

さて、一番問題になる利用者にとって、グループホーム入居は歓迎されることなのかどうかということがまだよく分かっていないことです。それというのも、建物が完成し利用できる状態になったのは、確かに、平成 30 年 4 月 1 日からでした。しかし、同時進行で施設整備を行ったところが 3 事業所有り、そのほか新規に事業所を立ち上げることになった事業所がもう一ヶ所あって、とても手が回らないという状態が今年の 8 月まで続きました。今この時期になって、ようやく利用者一人一人の気持ちを考えられるようになったというわけです。それでも、運営管理という側面から、例えば門限の時間をどうするかとか、利用者間で話し合って貰い一定のルールを設けなくてはならないだろうといった問題について、職員が率先してルールを作るということは何が何でも避けたいと考えてきていましたので、未だにルールらしきルールがない状態でグループホームは動いています。そろそろ利用者の人たちと、ルールを作るのではなく、生活を支援するために、利用者の人たちが何を望むのかを話し合っに行かなくてはならないと思っています。その意味では、利用者の人たちが職員に気兼ねすることなく感じたり、思ったりしたことをそのまま話して貰えるようになるのはこれからなのだろうと思っています。

以上がグループホーム運営についてのあれこれということになりますが、ショートステイ開始については、利用者はじめ関係者からも強く要請されていて、グループホームが軌道に乗るのを確かめてから始めようと予定してきましたが、そのような悠長なことは言っていない状況ではなくなりました。だからといって、軽々に始められるものでもないし、グループホームと同じ建物の中で行うことになるだけに、グループホームの入居者が不安定になるようなことは避けなくてはなりません、最善を尽くすしかありません。

そこで、「ショートステイ(短期入所)実施に向けて」という文書を職員に向けてお知らせをすることから始めることを予定しています。以下が、そのお知らせです。



↑ 1 階食堂、 ↓ 2 階ラウンジ



私たちの懸案事項であった「生活の場」を提供する福祉サービスは、「グループホームを開設運営すること」で一区切りがつかしました。しかし、生活支援を個々のニーズに合わせて行うことに強い使命感を持って行うと言っておきながら、その実践を始めるのはこれからのこととなります。

精神保健福祉の領域で大きな課題になることは、生活の場からの疎外に始まる収容の歴史を繰り返さないことは勿論のこと、生活の場を奪われず失わず日々の営みがかけがえのないものとして生活そのものが守られるよう支援をすることです。そのためには、グループホームという生活の場の提供が出来ただけのことを単純に喜んではいられません。

グループホームは、言ってみれば、様々な理由から日常生活で躓いた人たちにとって、ごく普通の生活を左程困ることなく送れるようになるための練習の場所だと言えます。だから、多少のお世話をすることになりますし、利用者の人たちもそれを希望してのことだろうと思っています。そうはいっても、誰しもがそうであるように病気にもなりますし怪我もします。同様に、精神失調も一生のうちに一度も経験することなく日常生活を送れたと言い切れる人は、皆無に等しい事だろうと想像しています。

このように、グループホームは利用者にとって一定の役割を果たし、より満足度の高い生活を実現するために何をしたらいいのかを経験的に知ることが出来る場とも言えます。ですから、「生活の場」を提供する福祉サービスが開始されたからと言って、精神保健領域のサービスを必要とする人たちからみたら、グループホームが出来たことで満足の出来るものでは到底ないと感じるだろうと思われることです。特に、精神失調し易い特性を持っている人は、できるだけ入院の回避が出来、自身の不安や緊張を受止めて貰え、出来得る限り早期に安心できる気持ちになれば、もう一言付け加えれば、傷つきやすい自尊心を大事してくれる人に、「そっと優しく」寄り添って貰えることを強く望んでいるだろうと思うのです。

こうした利用者の個々の実情に添い、なお緊急性の高さや、本人の主観感情を受け止めつつ関わり、早期に、日常生活に戻れるようにするための支援を行おうというのがグループホームに併設したショートステイで行おうということです。別の表現をすると、シェルターと一時呼ばれた緊急避難的な居場所の提供とも言えますし、ドロップインとよばれる取敢えず衣食住の提供を行おうというのも、視野に入れてのことだということです。多分このショートステイで果たす役割は、精神の不均衡状態に陥った人たちが示す多彩な精神症状の緩和であり、平穏を取り戻すための極めて端的な表現をすると、本人の不安、緊張、興奮、混乱、等への集中的な支援ということになるだろうと思っています。そのため、医療との緊密な連携は不可欠で、むしろ医療が中心で行うべき課題なのかもしれません。このあたりのことは、人権を考慮に入れた精神科救急の課題とも重なってくる領域で、私たち福祉領域に身を置く人間だけが考えるのではなく、広く精神保健に携わる者が、直面する課題を共有し協議深めていくことだろうと思っています。

ここまでは私たちが果たす役割となるショートステイのイメージについてです。この先は、誰がどのように行うのかということになるのか、そのことに付いて触れることにします。誰が行うのかは、相当な精神保健領域での臨床経験のある人であって、関わりそのものを振り返ることが出来る人、と考えています。理由としては、日常生活での経験は人と人との関わりを通して、その時何が起きていて、そのことをそれぞれの人がどのように感じているか、加えて、これら一連の出来事についてどのように受け止めていて、どんな感想を持っているか、といった表現を人に対してすることになりますので、最低限これらの文脈を踏まえての認識を持てる人を要求することになるからです。

こうしたことを踏まえての取り組みがこれから始まるということです。一年後、私たちのグループホームとショートステイの取り組みがどのようになったか、そのことを報告したいと思っています。



—編集後記—

今回は静岡から原稿をいただきました。初心を思い出されるような、また、足元を見直しながら近い将来を見据えるような、そんな感想を持ちました。様々な社会資源を立ち上げることが以前と比べて飛躍的に敷居が下がってきました。想いがこもらない、考えていない、ご本人の姿が見えない…そんな状況は避けていきたいとあらためて思います。当たり前のように、決してそうではないことも肝に銘じながら…。(長野)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会 TEL090-1811-7119